D44

高祖乃人格

269
398

帝國圖書館藏

一 高祖の御偉德
二 神格と人格
三 高祖の修養
四 穩和なる御性格
五 鎭護國家主義
六 活動と精力
七 抱負と信念
八 偉大なる人格

明治
45. 6. 13
内交

特49
17

高祖の人格

蓮生観善述

一　高祖の御偉徳

太閤は秀吉にとられ大師は弘法にとらると云ふ諺がある位大師の御名は行き渡つて居る大師といへば弘法樣の事だと云ふ事は走童牧兒に至るまで誰れ知らぬ者はない、古來大師號をお貰ひになつたお方は各宗を通じて三四十人もある、其の中には一人のお方で十四五も大師號を貰つたお方もあります、けれども、それらは餘り人に知られて居りません、只獨り我祖弘法大師の大師號に至つては立ッ兒匍ふ兒に至る迄誰れ知らぬ者は有りません、此の一事を以ても如何に我祖大師の靈德が偉大にましませしやが窺はれやうと思ひます。

高祖のお生れ遊ばしたのは今を去る千百三十九年前の六月十五日で、玉藻寄る讃岐の國、

屏風ヶ浦に御降誕あらせられたのであります。私共は今幸にしてその御聖日に遇ひ奉ることを得て歡びの念に堪へず、茲に聊か御偉德の片影を拙き筆に綴りて恩德の由を追懷し奉らうと思ふのであります。

大師は實に大聖の權化にして偉人の典型であります。之れを仰げば愈高く之れを鑚れば愈堅しとは大師のことであります。大師は吾等人間の智識を以て測り得られる範圍に於て最も完全にして最も圓滿なる理想的偉人であります。かゝる雄大なる偉人を私淑し憧憬し渇仰するは吾等の品性を陶冶する上に於てもその得る所が多からうと思ひます。エマーソンもいつた通り「吾等は生れ乍らにして偉人を崇信する天性を有つて居るのである」。故に偉人と共に生活する人は幸福である、人生を樂しく暮さんとするには偉大なる人格の光明に包まれるやうに力めなければならぬ。大師を信ずる人は其の信ずる事の深ければ深いだけ歡びと樂みを深く感じ得られるであらう。又未だ大師を知らない人も大師の偉德を知り、大師の人格を研究する事によりて次第に其の光明に照され、心の饑餓を醫し、精神に一種の怡悅を感ぜらるゝやうになるであらう。

二　神格と人格

一枝の花を視るにも前から觀るのと橫から眺めるのとで、その風情が異つて見える、それと同じやうに大師の御偉德を拜するにも、見やうによつて種々に變つて見ゐる。大師の偉德は廬山の八面どころではなく、田毎に宿る月影の如く、眺める人の心々に映ずるのでありますが、今之れを大別して人格的方面の高祖と、靈格的方面の高祖との兩樣に分けてお話をしやうと思ふ。

其の中先づ靈格的方面より高祖を拜しまするど、大師は大聖の權化にして、靈威赫々、不可思議の神力を現し、善あるものには幸を與へ、罪ある者には現罰を下し、其の應驗の速かなる事は響の聲に應ずるが如く、影の形に隨ふが如きものがある。故を以て高祖の御一代は一面より見れば靈驗奇跡を以て滿たされ、神秘不可思議を以て蔽はれて居る高祖の有り難く尊い所は此の方面にあるのでありますが、未だ大師信仰の門に入らない人は之れを一口に迷信だ妄信だと申して兎角その恩寵に遠ざからうとする傾向がありま

すので、私は其の神秘的方面の事は暫く措いて、之れより人格的方面の事を少しくお話をして見やうと思ふのであります。

高祖を單に一個の人間として考へて見ましても、其の偉大なる人格は吾等の修養上に於て、或は信仰上に於て、若しくば思想上に於て、又は吾人の日常行爲の上に於て、模範として大に敬慕すべき點があるのであります。高祖の人格は眞に春風の如くゆつたりとした、温かい、思ひやりの深い、そして活き〳〵とした華々しい性格を具へて居られたのである。大師の爲人は知れば知る程偉大にして、崇信すべく、感奮すべく、又其の人格は今日の思想界に於て、又今後の日本の精神界に於て、一種の典型とすべき立派な人格を備へて居られた人であると云ふ事を認むる事が出來るのであります。大師の御傳記中より假りに神秘的方面の記事をすつかり削り去つて了つても、尚大師の偉德は赫々として萬衆に光被し、理想的人格として、倫理道德の師表とするに足るものがあるのであります。大師の靈驗奇跡は此の如き偉大なる人格を透うして現はれたる神秘的神通でありますから、其の奇跡には一々道德上の光りが輝いて居るのである、信仰上の妙趣が湧

（高祖御修行の圖）

いて居るのである。

精神の能力につきては今尚學界未決の問題に屬して居りますけれども、事實は事實としてこれを拒むことは出來ません。靈驗奇跡は宇宙の妙機に接觸せるもの丶當然感得すべき現象であります。然し其の能力は崇高なる人格を待たなければ道德上の價値を生ずるものではありません。品性の下劣な者がよしや一分の能力を發揮する事が出來たにしても、其の奇跡には何等の威權も含まなければ、敎訓も寓するものでない、神靈上の奇跡は人格が高ければ高いほどその敎訓と威力が強くして廣大なのである。されば神靈上の信仰價値を論ぜんとするには其の根本に溯りて其の人の人格いかんを明かにしなければなりません。そこで私は高祖の人格的方面の一端を憧憬して高祖の御偉德を窺はうと思ふのであります。

三　高祖の修養

大なる煩悶に接しなければ大なる解脱を得る事は出來ない、高祖は修養時代に於て大な

る二重の煩悶に逢着せられました、それを透過して始めて大師は偉大なる人格を圓滿せられたのであります。

第一の煩悶は何んであるかと云ふに『死の問題』に對する恐怖と不安の念である、何んとかして人生の無常に對する不安を逃れたいものだとのお感じが日に一日と深くなり、儒教の教へによりて之れを醫せんとせしも孔子の教へは只だ眼前の一生を愉快に暮すといふ丈で、死の問題については何等の得る所がない、さらばと云ふので道教を研究して見たけれども、之れ亦た神丹錬丹を服して仙人になると云ふ丈で、死を解脱すると云ふ教へではない。生命を暫くの間延べ長らへると云ふ丈で、絶對に不死を得る所以の道でない。大師は煩悶と苦惱に氣も遠くなるほど當惑せられたが、不圖當時の名僧岩淵の勤操大徳に依り佛教の教へを聞き茲に始めて一點の光明を認められました。

それもその筈である、元來佛法の教へは生死を解脱するといふことが中心問題となつて居るので、お釋迦様が王城を脱け出られたと云ふのも全くその動機は死生問題の爲めでその說く所は一々大師の肺腑に徹し、高祖は夢より醒めたるが如く、朗然として心に安

着を得たまひ、悅びと嬉しさの餘り、その思想の經過を綴りて一編の書物をお作り遊ばされたのが三敎指歸三卷であります。故に三敎指歸は死の問題に對する煩悶解脫の說明書とも云ふことが出來るのであります。

斯くて高祖は此の死を眞實に解脫するには佛門に入るより外に道はない、と云ふ事を感じ給ひ、遂に志を決して佛門に入り、敎への如く沙彌戒具足戒等を受け、深山に攀ぢ登りて種々に苦行を積み、或は南都の諸山を歷訪して法相の唯識緣起を學び、三論の八不中道を習ひ、倶舍成實の法義を傳ふる等、實に出家以後の六七年間は出家以前の勇猛心にも優さる非常の勇氣を以て修養に力められましたが其の內にだん〳〵奥深く進み入るにつれて再び茲に大なる煩悶が起つてまいりました。

それは一體如何なる煩悶であるかといふに「生佛不二」の理に就てどうも分明しない點がある、そこで三乘十二部經を幾度も繰り返して見たけれども一向に疑ひが解けない、各宗の碩學に問尋しても滿足の出來る樣な答へをして呉れる人がない。悶々の餘り佛前に誓願して我れに不二の法を示し給へと祈られましたところが不思議な靈告を得ました

それは『經あり大毘盧遮那神變加持と名く、これ汝が要むる所の經なり』と、こゝに一縷の曙光を認めそれより其の經の所在を搜すべく大勇猛心を起され、普く四方に求め、五畿に周遊し、七道に往復して所々を遍歷せられましたけれども、一向に手がゝりがありません、然れ共大師は少しも力を落さず佛陀の靈告を深く信じ毫も倦み疑ふ心なく、倘も日本全國の中至らぬ限もない程に尋ね求めて居られました所が、一日人あり告て申しまするには大和の國久米寺は昔天竺の聖人來りて住せし所なれば靈應あるべしとの事でありました、そこで大師は久米寺に尋ね往き寶塔に入りて祈誓を凝し願くは經の所在を示し給へ我れ若しこの願を成せざれば此の座を起たずと誓ひを立て、一心の誠を捧げて夜となく晝となく凝然として祈り給ひしに、一夕境界の中に聲あり『有經在露柱』との告げを得ました、驚いて四方を顧るに闃として誰れも居りません。燭を點して巡行するに一柱に銘を彫りつけてある、その文に馱都は之れ釋迦の遺身經王は舍那の全體也といふ句がありました、大師は希望に輝ける眼を以て探り〳〵て遂に其の柱心より大日經七卷を得られました、紐を解いて之れを讀むに乘情滯りありて文句が通じません、

去つて之れを諸德に問ひましたけれども誰れとて答ふる人がありません。大師は折角お經を尋ね出すことは尋ね出したが其の中の意味が解らないでは尋ね出した甲斐がありませんので、悶々の情は一層深く、悲喜交々至りて立つても居ても居られない。

大師は遂に其事を其師勤操大德にお話をなされました所が勤操大德は大師の爲に上奏を奉りて入唐の勅許を願うて下されました、陛下は其の事情を聞こしめされて大に御感動あり、直に入唐求法のお許を得ました、大師は勅使と共に入唐して青龍寺の惠果和尚に遇ひ、金胎不二の深旨を受け、大日經の玄底を極め、生佛不二の疑ひはさらりと解け即身頓覺の幽旨を朗然として徹底せられました。大師の其時のお喜びはどんなであつたでありませう。

大師は日本へお歸りになるとすぐ判教々義を大成して立教開宗の宣言をなされました。その時のお歳は三十四であらせられました、修養時代は大凡三十歳前後のものと見ねまして、釋尊は三十成道と傳へ、孔子は三十而立と云ひ、ルーテルは三十四歳の時に宗教改革の決心をしたといふことである。大師は三十四の時に愈成道せられたのであるか

ら、大師の修養時代は約十八九ヶ年の久しきに亘つて居ります。その十八九ヶ年は短かいとは申されませんが、其間に修められたる百科の學術幷に繪畫彫刻書道等に比しては寧ろ短いと申さねばならぬ。大師は十八九ヶ年の間によくもかほどまでに多方面に亘りて深遠なる修養を積まれたものであると只々感嘆し奉るの外はありません。

四　穩和なる御性格

高祖の御性格は圭角のない、温和な、穩かな、平和主義のお方であつたので、常に出來るだけ爭ひを避け衝突をお避けなさると云ふ御氣風があつたのであります。彼のマホメットが右の手に劍を持ち左の手にコーランを擧げて征服的に傳道したなどゝは趣きがすつかり變つて居る。又日蓮上人が四個格言などの如き喧嘩腰の布教方針を執られたのとは大變にちがつて居る。大師は何處までも春風の洋々たるが如き態度を以て萬衆に臨ませられたのであります。

今一二の事蹟を擧げてお話をして見ませうなれば、傳教大師との御間柄の如き、吾等常

人の考へを以てすれば眞に不思議なやうである、兩雄並び立たずと云ふ諺の如く、兩大師の間には天台と眞言との敎義につきて必ず大に論爭があるべき筈なるに、毫も其形跡がないばかりでなく、芝蘭の馥んばしきが如く、常に相助けて救濟の事に盡し、互に法義を尋ね合つて少しも隔てがなく、打ち解けたる交際をせられたと云ふ事はさすがに豪い所がある。こは兩大師が何れも共に道念淸く、雅量に富んで居られたからでもありませうが、私は特に我祖大師の穩和なる御仕向によりて其平和を維持せられたのであらうと思ふのであります。我祖よりのお仕向け次第によりては傳敎大師は決して爭ひをお避けなされはしなかつたであらうと思はれる節がある。見よ傳敎大師は圓頓戒の事に關して南都の諸宗を相手にして大に論爭をせられたではないか、又顯戒論を著して熾んに論難攻擊をせられたではないか、それにもかゝはらず大師とは親善なる交りを續けさせられたと云ふ事は眞に不思議である。大師は一方に此の如く傳敎大師と親善であつた許りでなく南都諸宗の高祖とも親善な交りを結んで居られたのであります。そこで南都諸宗と傳敎大師との間に論爭が倍々激しくなるや、大師は其渦中に卷き込まるゝを迷惑に思

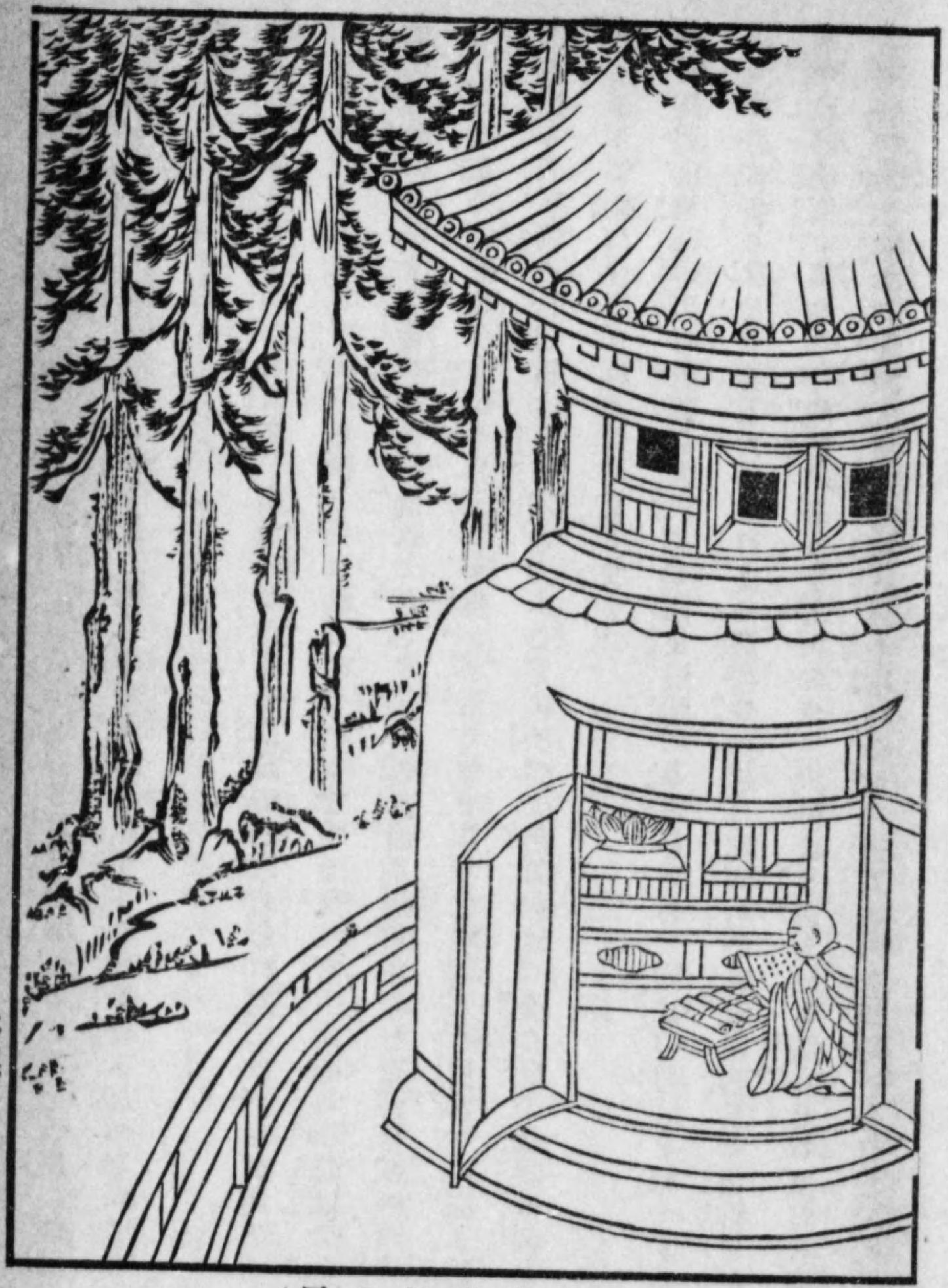
召され、どちらへ贊成を表すると云ふ譯にもまゐりません所から、其問題に就ては一言半句も意見を漏らし給はず、漂然として東北巡敎の途に上られました。

又法相の德一菩薩と云ふ人が大師の敎義に對して攻擊の矢を放たれましたが、大師は一向に相手におなりなさいませんでした、そは其論點が闇夜の鐵砲に等しいからでもありませうが、爭ひを避けると云ふ御氣風は茲にも現はれて居るのである。又た傳敎大師が釋論に就て數ケの疑難を擧げて釋論は僞作であるといはれましたけれども大師は他を向いて爭ひをお避けになりました、此の時若し大師が堂々御論辨を遊ばされましたならば必ずや傳敎大師との間に論端が開かれたにちがひないのでありますが、大師は何處迄も平和主義で爭ひをお避けになりました。それのみならず大師の穩和なる御性格は守敏僧都に對する御態度の上にも現はれて居る、釋迦に提婆、弘法に守敏と云ふ諺の如く守敏僧都は陰に陽に大師に敵對をせられましたけれども、大師は更にそれを相手になさいませんでした、僧都は何時も卵を以て盤石に向ふが如く、自ら碎けるより外はなかつたのであります。

大師は斯の如く穩和にわらせられましたから其御一代は順風に帆を揚げたるが如く、何事も誂向に何事も思ふ通りに、何事もトン〳〵拍子に成功せられたのであります。されどその敎義上の御主張に至つては堂々として一歩も讓り給はず、南都の諸宗を六七の住心に攝し、傳敎大師を目の前に据へて天台を第八の住心に判じ給へるなど、其抱負の雄大にして其識見の高遠なる、恰も衆星に對する月輪の如く、獅子一吼して群獸慴伏するの概がある。之れを要するに大師の御風格は穩和の裡に凛とした所があり、平和の間に犯すべからざる氣高い權威が宿つて居る。

五　鎭護國家主義

大日本國は大日如來の法爾の御淨土である、秘密の敎法を傳へるには最も緣の深い國土である、そこで大師は鎭護國家主義によりて此の國を盛んにし、此の國を開明にし、此の國を眞實の密嚴淨土にしやうと云ふ理想の下に必死の力をお盡しになつたのであります故に大師の御一代は國家のおん爲め、皇室の御爲めと云ふ事を以て一貫せられて居るの



（久米感經の圖）

でありますゝですから一座の修法を行ふにも、一返のお眞言を唱へるにも、一席の法話を致すにも、必ず鎭護國家、寶祚遠長と云ふ事を祈念の主要なる一條項に加へられてあります。

東寺の名を敎王護國寺と改め、高雄の神護寺を國祚寺と改められたのは何んが爲めでありませうか、皆此の主義から割り出されたのであります。又た宮中後七日御修法の如き他に比類のない大法會が今に行はれて居ると云ふのは何んが爲めでありませうか、皆此の鎭護國家の大師の信念が今に活きて働いて居るのであります。『天子眞言』と云ふ諺のある通り天子樣のお宗旨は眞言宗と云ふことに決つて居るのは、全く此の鎭護國家の敎理によりて結び合はされたのであります。

特に高祖は兩部神道の敎義を大成して國民道德の基礎を定め、國民の思想を統一する事に大にお骨折りになりました、それは佛敎の信仰と日本固有の神祇に對する信仰とが動もすれば衝突するやうな傾向がありましたので、大師は是非これを調和せねばならぬと云ふ事を感じ給ひ、嵯峨天皇と御相談の上兩部神道と云ふものを組織せられました。此

の兩部神道の敎義によりて我國固有の神祇と天竺傳來の佛菩薩とが鹽梅よく融合調和せられました、一方に佛敎の深遠なる敎理によりて宗敎心を滿足せしむると共に、一方には國家の歷史を益々尊嚴ならしめ、國家思想を培養する事に力を盡されました。これは實に高祖の國家に對する大なる一つの功績であらうと思ひます。

又高祖は卽俗而眞の敎理に基きて從來の山林佛敎を排し、隱遁主義を排して南都の諸宗が何れも社會に遠ざからんとし、時代人心に疎隔せんとしつゝあるの弊風を巧みに矯正して、國家の爲め社會の爲め人道の爲めに慈悲の手を垂れ、救濟の道を講せねばならぬと云ふ事を盛んに御主張遊ばさるゝと共に、高祖御自身も社會の爲め國家の爲めに大に活動せられました。そして大師はかゝる俗諦的經營が取りも直さず其儘に眞諦信仰の理趣に一致する旨を明かにして、宗敎的見地より國家的義務奬勵の原理をお示しになりました。大師以前の高僧中にも國家の擁護と云ふ事を說いた人がない事はありませなんだが、その說き方が徹底して居りません、又其方法も適切でありませんでしたが、大師の鎭護國家主義は其の原理方法を最も明白にお示しになつて居るのであります。

六　高祖の活動と精力

高祖の御計畫になつた事業は何一つ成就しないと云ふものはありませんでした。余人の出來ない事でも高祖が一臂の力をお添へになれば早速出來ました、讚岐の滿濃の池の如きがそれである、大名の力にも合はなかつた仕事を大師は少しの間に成功せられました、それかと云つて大師は築池術に秀でゝ居られたといふ譯ではないが、其の偉大なる德光と圓滿なる人格とは往く所として可ならざるなく、事として辨せざるはなかつたのであります。

而し如何に人格が圓滿でも德光が偉大でも、じつと隱遁して居つては其の感化は普及するものでない。弘法さんと云へば三尺の小兒に至る迄誰れ知らぬ者が無いと云ふまでに其の感化が光被して居ると云ふのは、其の靈力の感化にもよるのでありませうが一ッは高祖御存生中の絕對なる活動と無比の精力とに依れるもの甚だ多き事を思はねばなりません、高祖の一化六十二年の御傳記は實に活動の歷史と云ッてもよいのであります。

高野山を開拓する丈でも人力を以てしてはなか〱の大事業である、四國の靈場の如き何れの一ヶ所を開創するにしても容易ならぬ大事業である、それを高祖は僅少の歲月に成功なされたのである、又高祖は暇ある毎に錫を飛して四方に行化し、二百六十餘州の津々浦々殆ど巡歷しない所はないと云ふ程に跋涉して御座るが之れがまた却々交通不便な當時にありては尋常人の眞似の出來る事でない、そしてそれらの至る所に種々の人文に大關係ある有益なる御事績を澤山遺されてある、九州に於ては石炭の燃料とすべき事を五平太に敎へ、豆州にては溫泉の藥用とすべき事を老翁に示し、山城にては水なくして困れる村民に水脈を敎へて泉を掘らしむる等、此の種の事跡は枚擧に遑がない程である。又奧州の羽黑山にせよ、伊豆の修禪寺にせよ、鎌倉の江の島にせよ、野州の日光山にせよ、名山と云はれ靈場と稱せらるゝ所は大抵大師の御開創である。それのみならず橋を架け、池を掘り、山を開き、寺を建て、法を說き、經を講じ、祈禱を修し、巡化を爲す等一日として無駄に日を過させられた事はありません。片時も手を拱いてじつとして御座つた事はありません。それ程に活動してお忙しい間に大師は何處でどんな風にし

て御研究遊ばされたものか書道にあれ、繪畫にあれ、彫刻にあれ、詩賦にあれ、何れも入神の妙を極め古今獨步の技を有せられたと云ふ事は大師が如何に精力絶倫であらせられたかと云ふ事が窺はれます。

御選述の御遺書丈でも幾千冊の多きに達して居りますが、此の著作事業丈でも畢生の大事業である、又大師の書畫彫刻にして今現に傳つて居るものが澤山あるが、御在世には非常に澤山に御揮毫になつたものに違ひない、其の上に梵學を研究して經典の原語をお調べになつたり、「いろは」を作り、五十音を造りて文化の基礎をお立てなされたり、綜藝種智院を立てゝ一般子弟の教育にお努めなされたり、實語敎などのやうなものを作つて敎科書に供せられたり、實に其の御事業は何れの一ツに就て考へても容易ならぬ事業許りである。

而して此等の事業は大師が外部に向つて社會的に活動せられた一面を眺めたのでありますが、更に内に向つて其の御活動の模樣を拜するに一層驚嘆すべきものがあります。その御模樣は迚もこゝには盡されませんが畧皆さんの胸にも想像が出來やうと思ひます。

判敎に關する研究とか、敎義の大成に關する研究とか云ふやうな事は申すに及ばす、宗旨の立脚地を安固にする點や、徒弟の敎養に就ては云ひ知れぬ御苦心をなされてゐるのであります。創業と大成を一手に成就せられた大師の活動と精力には私共はたゞ〳〵驚嘆するより外に言葉がありません。

七　抱負と信念

おん年七ッのその時に　衆生の爲めに身を捨てゝ
五ッの岳に立ッ雲の　立ッる誓ひぞ頼もしき

此れは御和讃の中の一節でありますが、栴檀は二葉より芳ばしとの喩にもれす、已に七歲の御時にかゝる雄大なる抱負を有つて居られたと云ふことは眞に感佩の至りに堪へない譯であります。

高祖の御一代は人類の救濟といふことを唯一の目的とせられたので、高祖の御心は何時も吾等の幸福と云ふ事を忘れさせられた事はなかつたのであります。恰も慈母の赤兒に

於けるが如く、寢ぬるにあつても、覺むるにあつても、片時も忘れた暇はありません。此の世一生を無事息災に暮させるばかりでなく、死に往く未來までも幸多からしめやうとの二世の大誓願を起し、手を替へ品を替へて種々に御苦勞下されたのであります。かゝれば人爵などは大師のお眼には弊履の如く「人間少々の果報をや」と云ふ大見識を以て大師は一代を終始せられたのであります。そして人生を幸福ならしむる爲めには單に安心信仰を主觀的に得させるばかりではいけない、客觀的に見るもの聞くものをして善ならしめ美ならしめ輝ある淨土を現出せねばならぬ。希望に滿てる黄金世界を此の土に開かねばならぬ。即事而眞とは密敎淨土を此の土に建設する事である、といふ思召より文化の普及、人文の開發に種々に力を盡されました。それと同時に一面には心靈上の慰藉に就ても大改革を試みられました、そは從來の如き死灰的、學究的、隱遁的佛敎では迚もいけない、又論議や問講を仕事にして居るやうな事でもいけない、又三大僧祇の修行を積まねば佛になれぬなどゝ云ふやうな迂遠な敎へでもいけない、即身頓覺の敎へによりて現當二世の幸福を得させねばならぬ、三密加持の力によりて人類の救濟に盡さ

ねばならぬと云ふのが大師の御抱負でありました。

大師の抱負が如何に廣大にして、その信念が如何に深遠であつたかと云ふ事は左の御誓願の文によりて其の一端を窺ひ知る事が出來やうと思ひます。

　遙かに念じて我を慕ひ信を盡して恭敬せば我明かに知見して必ず二世の福ひを得せしめん。

　日々化身を下して有縁の衆生を加持護念して現當の所願を成ぜしめん。

捨身誓願の始めより、此の御遺告の誓願に至るまで、其御抱負と信念は終始一貫せられて居るのであります。

大師は此の如き慈み深さ、情けに滿てる御心を以て萬衆に對せられましたから、草の風に靡くが如く、一たび大師の尊容に接する者は如何なる惡人と雖も其の偉德に化せられぬ者はなかつたのであります。上は九重の御一人より下は賤が伏せ家に至るまで知るも知らぬも、其の德を慕ひ、清涼宗論の際の如き、初めは疑ひの眼を以て大師を詰らんとせし人々も一度其の尊容に接するに及びては、法相の源仁、三論の道昌、華嚴の道雄等

忽ちに大師の門に投じて御弟子となられたのであります。かう云ふ風でありますから皇室の御歸依も厚く分けても嵯峨天皇とは知音蘭契の御親み深かりしことは今更申す迄もなく、平城天皇は御落飾遊ばされて大師の御弟子とならせ給ひ、皇太子高岳親王も亦た大師の門に入らせられて法名を眞如法親王と申し奉り、嵯峨天皇も弘仁十四年に冷泉院に於て灌頂を受けさせ給ひ、其の他皇后大臣百官また同じく法水に浴するもの多かりし事は史上に歴々として鳴りますが、大師の德光は眞に冲天に輝ける太陽の如き概況でありました。其燃ゆるが如き信念と天をも蔽ふの大抱負は天上天下を光被して照さぬ隈はなかつたのであります。

八　偉大なる人格

高祖の偉大なる人格はこゝに幾ら筆を強めて書き顯はさうとしても、其熱烈な、其力の強い、そして其の氣高い光景は話さうにも話して見やうがない、之れは皆さんが高祖の事蹟に就て御覽になれば如何に情けのある、恕の深い、力のある、德の優れたお方で

(假名の御製作)

あつたかと云ふ事がお判りになりませう。大師は實に活動的であつて、さうして何處となく強い威力を有つて居られました。如何なるものにも殆ど喩へやうのない程偉大な人格を備へて居られたのであります。

偉人の偉人たる所は一身の利害を忘れて人類の幸福を思ひ、自己を犠牲にして萬衆の爲めに盡さうといふ美しい心掛けにあるので、その公明なる心事はやがて天地に遍滿し、宇宙の大を蔽ひ、永遠に輝きを遺すものであります。若し之れに反して不潔の心事を以て事を始めましたならば、それは皆惡魔の行爲となるのである。見よ一世の英傑大那翁が孤囚となりて寂しき終りを告げたのは全く自己の功名慾、權力慾の爲めに他の幸福を蹂躪したからではないか。

回顧すれば大師が五岳山頭に悠々たる白雲を眺め、屛風が浦に瑟々たる松風を聞きてより、山あり波ある六十二年の生涯は實に光榮あり、生き甲斐ある生涯でありました。眞言の法燈は爀々として照り輝き、三密の新法音は草も木も倶に靡くと云ふ有樣で、吾等は其の御一代を回想するだに轉た莊嚴の念に動かされざるを得ません。

高祖は横統一切の大理想を以て千經萬論を打して十ケの住心に包み、即事而眞の敎旨を以て俗諦の行爲其の儘に眞諦の妙旨に一致する所以の妙旨を示され、熾んに人生の救濟に力を盡されたのであります。思ふに宗敎が人生に偉大の力を有つて居るのは、人生の實相に觸れて人の煩悶を救ひ、人の迷ひを解き、能く實社會の紛糾を超脱せしめ得るからで、人生の現實に觸れないやうな宗敎は何んの力もあるものではありません。

南都の佛敎に慊らぬ幾萬の生靈は悉く天の一方を仰いで雲雨の到らんことを翹望して居りました、此の時に當りて苦悶の燄に向つて沛然たる甘露の雨を濺いだのは我人天の師、三界の雄、人生の慰安者たる弘法大師其の人であります。

高祖は先づ當時盛んにありました二種の迷へる思潮に向つて大なる戒飭を加へられました。二種の迷へる思潮とは一は肉體を苦めて死後の快樂を享けんとする苦行派の嚴肅主義と、二は肉に溺れ酒に耽る快樂派の本能主義とであります。此の二種の思想に向つて大師は激しく排斥を試みられました。そして高祖は穩和なる中道主義の修行方針を皷吹せられました。茲に於てか賢愚老幼の別なく萬衆は倶に大師の敎へに赴く事河水の海に

注ぐが如く、日向葵の太陽に向ふが如く、忽ちにして一世を風靡したのであります。こは固より其の教へが時代の要求に觸れ人心の苦悶を除くに適切であつたからでもありませうが、併し大師の偉大なる人格の力が最も主になつて居るといふ事は申す迄もありません。

當時の佛教は苦行主義でなければ瞑想主義に流れ、瞑想主義でなければ註釈主義に走り註釈主義でなければ山林主義に陷り、山林主義でなければ高枕主義に失して、一ツも佛教の眞旨義を社會に宣傳して居るものはありませんでした。そこで大師は社會人道の爲めに奮然として起ち、現在的、社會的、國家的主義の新福音を宣傳すべく大活動を開始せられました。大師の教義は心靈の救濟ばかりではなく靈肉双濟の主義の下に精力を盡して活動せられたのであります、故に大師は啻に心靈上に赫々たる光明を放てるばかりでなく、人格の模範として千有餘年の今に至るまで其の德光は輝いて居るのであります思ふに今日の如き現慾に囚はれ、懷疑の雲に蔽はれたる時代人心を救濟するには是非とも大師の如き偉大なる人格を標榜して、そを憧憬せしめ、其の感化に浴せしむると云ふ事は何より必要であらうと思ひます。

高祖の人格　終

D-44

明治四十五年六月五日印刷
明治四十五年六月十日發行

著者　蓮生觀善

發行兼印刷人　大阪府平民　高橋圓隆
京都市下京區三哲通り大宮東入第一番戸

發行所　六大新報社
京都市下京區三哲通り大宮東入第一番戸

印刷所　六大新報社印刷部
京都市下京區三哲通り大宮東入第一番戸

49

高祖の人格

蓮生勸善

国立国会図書館

特

1

016878−000−5

特49−17

高祖の人格

蓮生　観善／著

M45．6

ABE−0094